
双月に咲く紅い桜

銀衝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双月に咲く紅い桜

【Nコード】

N5763Y

【作者名】

銀衝

【あらすじ】

アルビオンとの戦争が終わり平和となったトリステインに人切りが現れた。サイトとルイズは女王陛下からのご命令によってその人切りを捕まえることとなり訊き込みをするといろいろな情報が出てきた。ある者は剣のような男、ある者は剣のような生き物のような形と・・・銀魂とゼロ魔のクロスです。銀魂キャラは今のところ銀さんだけ出す予定です。真選組や万事屋のメンバーは本編では出す予定は80%ありませんので。

第零訓 初めて行く場所って違う世界？ってみたいに感じちゃうよね

トリスタニアの裏路地で頭と体が離れた人が発見され王宮はパニックに陥っている。なぜならその発見された死体はトライアングルクルスのメイジであつたからであつて、そしてその者は最近噂されている人切りに殺されたからだ。

「アンリエッタ様、さすがにこれは危険すぎますぞ。」

マザリーニがそういい、「わかっています」とアンリエッタそう返した

「しかし相手の実体がかめないと今回のような事になってしまいます。」

「では『水精霊騎士隊』のサイト殿に頼むというのはどうでしょうか？ 彼はアルビオンでの戦歴はすごく、そうそう人切りには負けません。」

「……………わかりました。ではサイトさんにその主であるルイズをここに呼んで私がお伝えします。それに、この二人ならば早々やられはしないでしょう。」

そしてその会議によってルイズとサイトは一度、王宮に呼ばれることとなった。

トリスタニアとトリステイン魔法学院に道をまっすぐトリスタニア

に向っている、その者はハルゲギニアでは珍しい服装に銀色の髪をした男が愚痴をこぼしながら進んでいた。

「ったくよー、なんで俺がこつちの世界の辻斬りを倒さなきゃなんねーんだよ。こつちの世界はこつちの世界の住人が倒しやアいいだらうがよ。つーかよオ、依頼人のアイツがいねエとどんな奴かもわかんねーだらうがつーかなんで新八と神楽連れてこれねエんだよ。そもそもよオ・・・」

と、どうでもよくツッコミもないのでしたら喋っていた坂田銀時であった。

第零訓 初めて行く場所って違う世界？ってみたいに感じちゃうよね（後書き）

新八「ていうか銀さんいつまでたらだら喋ってたんだ。いくら零訓でも先に進まな過ぎるだろーが！」

神楽「これぞ銀魂クオリティなんだヨ。」

新八「つーか作者も最初の作品でクロス系はねーだろ。」

神楽「さっさと次回予告始めろや駄眼鏡が」

駄眼鏡「誰が駄眼鏡だアア！ていうかなんで名前まで駄眼鏡になってんだ。」

神楽「新八がいつまでも始めないので私がやるアル。次回・ゼロのい・サイドの話はやるアル。」

駄眼鏡「使い魔読めねんかいイイ！つーか最後まで駄眼鏡のままかよ」

第一訓 オカマに耐性ついたらついたでなんか変な気分になってしまっ

今、王室ではアンリエッタ女王陛下とマザリーニ枢機卿、そしてハルケギニアでは珍しい着物の男が今重要な話をしようとしている。

「初めまして、あつしは鈴木鉄平と申しやす。実はここには特別なお話をしにきやした。」

「して、その特別な話とは？」

「現在ここでは辻斬りが流行っている聞きやして。あ、辻斬りというのはあつし達の間での人切りの別名でして。悪いこといいやせんから、辻斬りには係わつてはいけません。命がいくつあつても足りません。」

「それはどういうことですか？命がいくつあつても足りないということは人切りの正体を知っていることですか？」

「はい。しかし使い手はわかりやせんので、そこはご遠慮ください。」

「いいえ、大丈夫です。敵の強さ位は知りたいものですから。」

「では、お話ししやす。」

彼が、その辻斬りの姿・強さ・能力などを説明をつけて、辻斬りに勝てる確率は限りなく0に近いこと通過してた。なぜならその男の説明では、その者の動きは人ではなく化け物と呼ぶにふさわしく、その者の力は戦艦十隻相手にできてしまうとされているからだ。

そしてトライアングルクラスのメイジがやられた理由も納得でき
しまう。

「ルイズにサイトさんをお願いするのはやめた方がいいわね。」

「ではわたくしめがお伝えします。」

そう言ってマザリーニ枢機卿は王室から出ようとしたとき、「待っ
てください」という声が聞こえた。

「どういたのですか？スズキ殿」

「そのルイズとサイトというのは強いのですかい？」

「ええ、サイト殿はアルビオンで七万という兵に一人で立ち向かっ
たのです。」

その言葉を聞いて鈴木鉄平は何かを考え、その後口を開いた。

「お願いを一つよろしいでしょうか？」

「なんででしょうか？」

「じつは・・・」

『女王陛下！ルイズ殿とサイト殿がお付きになりました！』

とKYな伝令が来てしまった。しかしこの話はルイズ達にも聞いて
ほしい内容なのでアンリエッタは「通しなさい」と指示をした。そ
の後「失礼します」とともに二人の男女が入ってきた。

「いやー、ほんとこっちにもパフエがあってほんつつとによかったよ。このまま糖分不足で死んじゃうかと思っちゃってさア、あ、すみませーんジャンボパフエもう一個お願いします。ついでにイチゴ牛乳もあつたらそれもお願ひします。」

ちなみに銀時がいる店は『魅惑の妖精』亭である。銀時はこの店長がちらつと見えたが別にどうつてことなかった。なぜつて、銀時の世界には西郷つていう馬鹿強いオカマがいるからである。

「実は俺は別のとこじゃア、万事屋つていう何でも屋をやつててさア、その従業員に胃拡張娘がいてねエ、そいつのせいで万事屋は火の車さ。それでも銀さんめげないで頑張つてるんだア！」

「あらーん、何でも屋をやつてるんだ。ならウチの雑用をやつてくれないかしら。」

「依頼料によつちやア、やつてやらないこともないぜ、西郷もどき。」

なぜか加わつていたスカロンも気にせず仕事の交渉をしていた銀時だった。つてこれつて作文？そして銀時の知らないところで決闘の申し出が決まつていることも知らなかつたのだつた。つてまた作文？

第一訓 オカマに耐性ついたらついたでなんか変な気分になってしまっ(後書き

新八「はい、という訳で今回はここまでです。」

神楽「そもそもなんで銀ちゃんだけの出演なんだヨ。私も出せヨリア。」

新八「神楽ちゃんは中の人と同じだからほんの少し出るかもよ?」

神楽「マジでか!キャットホーイ!」

新八「と言っても、作者は出す予定はないらしいけど」

神楽「てんつめ、何ぬか喜びさせとんじやア!」

新八「ぐはあっ!」

その後、新八を見た者はいない。

新八「って何ナレーションで勝手に僕殺してんですか!」

神楽「新八だから仕方ないネ」

新八「ボク関係ねーだろ!っていうかそろそろ次回の予告入ろう、神楽ちゃん。」

神楽「仕方ないから、ちゃんと聞けヨ愚民ども。聞かなかつたら死ぬアルからな。」

新八「何その上から目線。」

神楽「次回、パー子再来？」

新八「銀さん……オカマになって帰ってこないでくださいよ。」

第一・五訓 人はプロフィールを見ただけじゃはからない

オリキャラ紹介

鈴木鉄平

銀魂世界じゃごくごく普通の名前、そして今回の依頼人でもある。銀さんのことを白夜叉と知っている。人物でもある。

今回の依頼は、ハルケギニアに流れた紅桜を殲滅するために銀さんに依頼をした。

この者には時空を飛べるという中二臭い能力が生まれながらに備わっている。ただし、銀魂世界とゼロの使い魔世界しか飛べないのであった。だからなんで作文？

今のところはここまでにしておきます。後はネタバレになるので書きません・・・。

紅桜の詳細

原作設定に加えて、より強い体に移るといふ憑依機能も付いた。それだけです。ただし主力メンバーには乗り移りません。そっちの設定考えるのめんどくさいので。気が向いたらやる可能性もありま

५.

第二訓 大人になっても恐怖すると自然と涙が出てしまう

王室は静まり返っていた。アンリエッタにルイズにマザリーニ枢機卿はいきなりの決闘申込みに、サイトはそれに加え白夜叉という単語に驚いていた。

「いきなり決闘の申し込みなんて、どうかしてるわあんだ。」

「いいや、大丈夫です。彼は攘夷戦争という圧倒的不利な戦争を刀一本で白夜叉という異名が付けられたほどの実力！早々やられやしやせん。」

「サイトはどうなの？」

「あのひとつ聞いていいですか？」

「なんです？」

「白夜叉というのは白い夜叉おにということですよね。」

「さすが日本の方だ、やはり簡単に答えが返ってくる。そうですね、白い夜叉おに。伝承ではこういわれていやす。」

・ ・ ・ その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく、夜叉

今話題に上がっている白夜叉はというと、なぜか女装をさせられていた。しかもスカロンよりも似合っている。

「あの〜、雑用をやるはずなのになんでこんな恰好なんですか？」

「ん〜、トレビアーン。似合っているわ、ギントキは今日からその恰好で働いてチップを稼いでもらうわ。」

「こんな恰好で寄ってくる変態ヤシはいねーよ!」

銀時はめっちゃ怒ってる、それもめっちゃ。

「こんな恰好で仕事するくらいなら、皿洗いした方がまだマシだわ!」

「そんなこと言わずに、私より似合っているんだから。」

「嬉しくねーよ。なんでお前と比べられなきゃならねんだよ。せめて店の娘にしろや。」

「んも〜、わがままね〜。」

「大体よオ、なんでこっちに来てまでパー子の恰好しなきゃなんねエんだよ。カマッ娘クラブじゃないんだかさア。」

「まあ、冗談はここまでにして仕事をいうからよく聞いてね。」

「冗談かいいいいい!こんな恰好までさせてエエエ!」

「ギントキの仕事は皿洗いとゴミの片づけね。女の子が持てないよ
うなヤツをお願い。」

「おいイイイイ！話聞けエエエエ！」

「じゃあ、お願いね。今日一日だけだから、依頼料もちゃんと払う
から。」

「たく、仕方ねエな。わあたよ、やりやアいいんだろやりやア。そ
の代わりちよつと聞きてエことがあんだがよオ？」

「彼氏は募集せてないわよ。」

「ちげーよ。鈴木つて野郎知らねエか？」

スカロンはしばらく記憶を探っていたが、予想通りの答えが返って
きた。

「知らないわね、珍しい名前だから普通は記憶に残るはずだけど。」

「そうか、わりーな。んじゃ作業始めつか。」

その後、ギントキは店がにぎわったところで仕事が終了し、スカ
ロンのところに向っていたら店の中

が騒がしく、見に行ったら客は怯えスカロン等の店の娘たちがつか
まっていた一（スカロンを娘というのは西郷のことがあるからだ）。

店の中を見ると棒切れを持った強盗がいた。なんでみんなが棒切れに銀時にはわからなかったが、それもそのはず、なぜなら依頼人から魔法のことは聞いていないからである。

（つたく、あんな奴西郷みたいにドンと吹っ飛ばせよスカロンさんよオ。）

そう言い、銀時は、腰に差した木刀（洞爺湖）を抜き、店の中に入った。

「オイオイ、弱い者苛めはいけないよ、お兄さん。」

「なんだてめー、これが見えねーのか。」

「棒切れにしか見えないけど。そっか、分かった魔法使い気取りの強盗さんでしょう。分かる分かる、俺だって必殺技があればゲーム化できるとか常々思ってるもん。だってさア、必殺技カッコイじゃない。そういった少年心でしょ。分かるわ。」

銀時は敵の火に言葉の爆薬を投げ続けて、ついに強盗は呪文を唱えて、杖を銀時に向けた。

ポオン！

ドットクラスのファイアーボールとはいえ、銀時は何が起きたのかわからなかった。

（いやいや、これはない、これは絶対ない魔法なんて絶対ないトリックがあるはずだ。探せってかさつき呪文となえてなかった。これって、もしかして本物？っーかあいつファンタジーなんて一言

も言つてねえぞ。」

そんな考えをしていたら強盗が、

「次、喋つたら当てるぞ。」

「すみません。」

すでに泣きそうになっていた。すごく泣きそうだった。いや泣いてないよ、絶対泣いてないよ。

「さあ、ここにいる奴の有り金全部よこせ。その半泣き天パもだ。」

「誰が天パじゃこらアアア！今言った言葉全部取り消して全国の天パに謝れエエエエ！」

そう言い放ち、その場から走り、足で強盗の杖を蹴り飛ばした。その後強盗は床に倒れて銀時の足で踏まれて身動きが取れなかった。

「はい、終了。」

「なんで最初から向かってこなかった。あんなら今みたいに一瞬で俺を倒せたらどう。」

「ん〜、ノリ？」

「ノリで泣くのかよ！」

強盗はそう言つて気絶した。だけどそれを余所に店の中から大歓声

が聞こえていた。

『すげー！！』

『瞬殺だー！！』

『カツコイイー！！』

ちなみに、涙目になっていた所は全員見なかったことにしていた。

こうして、銀さんの一日は幕を閉じた。明日がどれだけ大変な思いをすることも知らずに。

「つーか強盗の話短っ！」

第二訓 大人になっても恐怖すると自然と涙が出てしまう（後書き）

新八「銀さん……」

神楽「銀ちゃん……」

銀時「二人して何その眼、銀さん泣いてなんかないよ。これ絶対！」

新八「まあ、そういうことにはしておきましょう。」

神楽「情けないネ、軽い荷物を運べない男くらい情けないネ。」

銀時「ひどい神楽ちゃん！銀さん一人寂しくやっているのにその言い方は無いでしょ！」

神楽「ドットクラスでビクビクするなんて情けないアル。虚無の担い手って言われて驚くなら分かるけど。」

新八「何気に声優ネタ使っているんですけど。」

神楽「バカ犬！とでも言っただけだったのか。このM野郎が！」

新八「言っただけエエエエよ！それよりそろそろ次回の話に入りましょう。」

神楽「次回、銀ちゃんの災難な一日。」

銀時「何その不吉な予告。」

新八「もう一つ言うと、次回は真選組があとがきに出ます。銀さんは出ませんよ。」

第三訓

王室での決闘騒ぎはなんやかんやでやることが決まり、現在ルイズとサイトは坂田銀時といわれる男を探している。

「やっぱり見つからないわね。」

「でもトリスタニアには着いてるって言ってたけどな。」

「でもそれ曖昧な情報で・・・」

『てんめエエエエエエエ！いい加減にしやがれエエエエエ！』

店の方から人の怒鳴り声が聞こえていた。その店は『魅惑の妖精亭、ルイズとサイトが前にお世話になったお店である。』

『俺のパフェが二個もこぼれちゃったじゃねエかアアア！』

二人はパフェ二つでそこまで切れるのかよ、と思いつつ店の中に入っ
ていった。

店の中に入ると、おそらくパフェをこぼしたであろう男が銀髪の男
にボコられていた。

「いいか、これから喧嘩するときゃア、周りの迷惑考えてから行動し
るよ。いいな？」

ボコられた青年と、その青年と喧嘩していた男が同時に「はいっ！」
と怯えたように返事をした。

「じゃあ解散！」と声がかかり、一斉にその二人は店から飛び出して行った。

その後、その騒ぎが何事もなかったかのように銀髪の青年はパフェ一つと注文していた。その青年の特徴は銀色の髪で死んだ魚のような眼をした男であった、これは鈴木という男が言っていた特徴と一致していたので、すぐさま駆け寄り「あなたがサカタギントキね」とルイズは言った。

「オイオイなんだよ嬢ちゃん。いま俺パフェ食ってただよ、話なら後で聞くからあっち行ってくれ。」

ルイズは貴族に対しての言葉使いがなっていなかったので怒ろうとしたけど、サイトがその間に入って

「銀時さんですよ。鈴木って人があなたを探しています、お城まで来てくれますか？」

銀時は鈴木の名前を聞いて「わかった、行ってやらア」の言葉が返ってきてお城に向うこととなった。後ろでルイズが怒鳴っていたけど無視していた。

お城に着き銀時は鈴木顔を見るなり全力でドロップキック繰り出した。

「てんめー！何俺をこの世界に一人置いてくれとんじゃアア！危う

くのたれ死ぬところだったわ！」

どうやら彼もこっちの世界の人間じゃないらしい。そもそも彼は強いのかもわからない、ほかの人も誰一人そう感じていない。なぜなら今の彼は隙がデカ過ぎるからだ。

「銀時さん、やめてください。少しミスしてしまいやして、ですが無事でよかったですじゃないですか。」

「無事なもんか！変な豚人間に襲い駆られるわ、杖を持った野郎に火に玉飛ばされるわで大変だったんだぞ。」

「まあまあ、代わりと言っちゃ何ですがその少年と戦ってもらいましょう。」

「俺は損しかしてねーじゃねエか！」

その後数十分の口論の中ついに決闘の話まで戻った。

「つまりこいつが七万の軍勢に一人で挑んだ奴だからお互いの実力を図るために戦えと、そういうことか？」

鈴木は「ええ」と軽口をたたいていたが返ってきた言葉は

「やだ」

『！っ、』

本人たち以外のその場の全員は驚いた。

「なんで勝負し「豪華ディナー付」やってやる。」

しかも簡単に釣られた。

「あのおう、木刀でいいんですか？」

「ああ、こっちの方がしつくりくるからな。」

二人は現在お城にある訓練所にいる。サイトはデルフリンガーを、銀時は洞爺湖と書かれた木刀を。

（あれ絶対修学旅行のおみあげだね。）

『試合開始！』

その声とともにサイトは走り出し剣を振り降ろした。ガンダールブの力が加わったサイトのスピードは並の身体能力では躲すことはできないが、銀時はサイトの動きを読みうまく躲して木刀で反撃を出した。

サイトは木刀の攻撃を避けて一旦距離を取ることにした。

「オイオイ、お前本当に人間か？人間のスピードじゃねエぞそれ。」

「ルイズに召喚されてガンダールブっていう使い魔の力をもっているからだと思うけど。」

（アニエスも強いけど、彼の実力はアニエス以上だな。ガンダールブのスピードについてくるなんて。）

サイトはいろいろな修羅場を潜り抜けていたけど、銀時はそれ以上の修羅場を潜り抜けていた。

銀時はサイトの实力を見て今までの戦いを振り返って

（紅桜や夜王鳳仙程ではねエがこいつはキツイ戦いになりそうだな。）

二人は考えごとを終えたと同時に一斉に戦闘を開始した。

サイトは縦に横に斜めに実践剣術を使い、銀時は太刀筋が読めず所々で足も入れてくるのでハチャメチャな動きをしていた。

攻撃しては避け攻撃しては避けの繰り返しで、そのやり取りが約一時間ほど続いていた。サイトはガンダールブの力を借りているので徐々にその力が薄れていき、銀時はサイトの人間離れた動きに翻弄され息が上がっていた。

「お互い限界見てエだからそろそろ決着つけんぞ。」

「ええ、分かっています。」

お互いは一定の距離に立ち、息を整え構え直した。その空気にそこにいる全員は息をのむ。

そして二人は走り出しそして・・・

その一方でトリスタニアの裏路地ではまた人が殺されていた。しかもその者はスクエアクラスのメイジだった。そこには右手には脈を打っている一本の刀があった。

第三訓（後書き）

沖田「じゃあ、後書きしやすぜ。とその前に近藤さんは？」

土方「さっきあの女にボコられていたからそろそろ戻ってくんじゃねーのか。」

近藤「いやー、すまん遅れた。」

土方「近藤さんもいい加減諦めたらどうなんだ」

沖田「いや、ありやもうだめでさア。」

近藤「どうした？トシに総悟？」

土方「いや、なんでもねエ。それより次回のことを話さなきゃなんねーだろ。」

沖田「大丈夫でさア、ちゃんところに書いてありやす。」

土方「なになに、『次回、土方遂に沖田に殺される』ってこれお前の願望じゃねエか！」

沖田「間違えやした、こっちが本物でした。はい近藤さん。」

土方「てんめ、総悟まだ俺を狙ってやがんのか！」

沖田「ほんの冗談ですよ、土方殺す。」

土方「おい、本音漏れてんぞ。」

近藤「あつちで二人が争っているの俺が言うぞ。次回、俺たちの戦いはまだまだこれからだ。ってこれ打ち切りなの打ち切りになっちゃうの！」

土方「待てエエ！！総悟！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5763y/>

双月に咲く紅い桜

2011年11月20日07時20分発行